

進路希望の実現を目指した国語科および学年の指導について

福島県立白河高等学校

教諭 小野寺 洋子

1 はじめに

急激な少子化、コロナ禍を経て進むICT化などの影響により、教育現場を取り巻く環境は激的な変革期を迎えている。地域随一の進学校として伝統を重ねてきた本校においても、単純に大学合格者数増加を目指すのではなく、どのような生徒を育て送り出すか、という目標を明確にし、その達成のための具体的な行動を求められる場面が多くなった。「知識を活用できる力を高め、生涯学び続けようとする強い意志とたくましい行動力を身に付けることにより、社会の発展に貢献できるリーダーを育成する」ことが本校のスクール・ミッションの一つである。それを柱とした上で、国語科教員・学年主任として、本校生の進路希望の実現を目指して取り組んできた実践を以下に記す。

2 実践の内容及び方法等

(1) 国語科の授業における取組 ―現代文分野について―

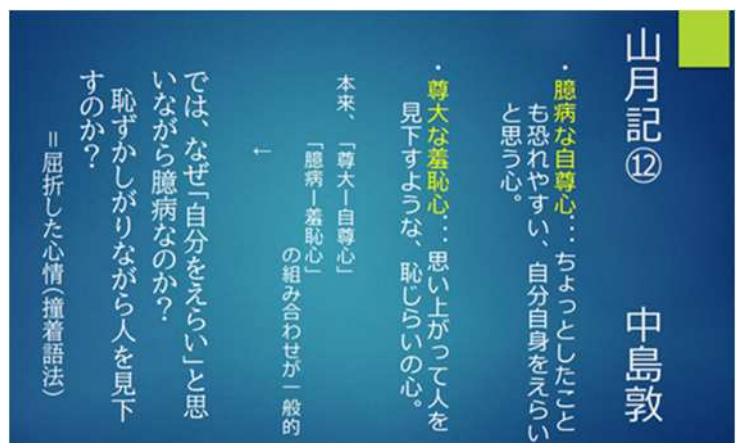
高等学校の現代文分野（科目名「現代の国語」「論理国語」「文学国語」）においては、日本語が母語としてある程度は身につけていることを前提とし、思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことが求められる。そこで、ただテキストと一緒に読んで要旨を確認するだけの授業ではなく、対話と表現を通じて思考と理解を深めていくことを目指し、授業を構成するよう心がけた。

① 構造に注目した読解

「対話と表現」以前に、テキストに書かれている情報を正確に、そして筆者の思考過程を本文に忠実に読み取ることが、大学入試においても日常生活においても重要である。評論はもちろん、文学的文章にも論理性は存在しているため、「文章の論理構造に着目する」ことを目指して授業を構成している。具体的には、「1 文章とは、筆者の意見（抽象）と具体例を軸とし、『同値（ある概念の言い換えや説明）』と『対比（逆の概念の提示）』で構成されていること」、「2 接続詞は文脈のガイドとして機能していること」に注目させ、実際に本文に線や記号を書き入れながら読む。構造に着目する読み方を導入した結果、「一度読み方を覚えてからあとはひたすら演習を積みました。そうすると設問者が自分たちに求める答えがなんとなくわかってきます。本当に、本当に国語ができなかった僕が、最終的にはそれなりの点数をとれるくらいに成長できました」（R6年度大学合格体験記より抜粋）のように、記述が課される大学の受験者に特に好評であった。

② 対話を深める発問

思考力・判断力を養うために重要なのは、発問の質であると考え。新教育課程で学んできた生徒たちは、話し合いやプレゼンテーションなどのアウトプットの経験を豊富に持つが、単に「話している」だけでは思考力は深まらない。じっくりと考えるに値する発問ができるかどうかで授業の充実度は大きく変わる。そこで、その時間の核となる質問を準備して授業に臨むようにした。そして、生徒の状況に応じて、クローズドクエスチョン



ンとオープンクエスチョンを織り交ぜながら、「わかりません」とできるだけ言わせないような質問の仕方を心がけた。また、試行錯誤の重要性を実感させるため、的外れな回答も拾い、答えのすぐ出ない問題については周囲との話し合いをさせてから再度尋ねるなど、失敗が気にならない環境を作った。授業内の様々な対話を経て自分の回答を練り上げる場面を設けるように意識している。

③ 「書く」という表現

総合型や推薦型選抜の面接試験では、自分の意見を直接述べるという意味での表現力が求められる。その一方で、筆記や小論文試験では「書く」というアウトプットが必須である。説明や本文の共有などでICTを活用する場面は増えたが、書くことで思考を深めるという効果も含め、「手で書く」という身体性を伴った「表現」の意義はまだ消えていない。限られた時間の中で膨大な情報を処理する大学入試に対応することを踏まえ、「早く、正確に書く」「思考を時間内で表現する」という演習を單元ごとに課している（内容の例：「文章の要約」「発問に対する自分の意見」「読書レポート」「作品の鑑賞文」「抽象的な文章の具体例を考える」等）。さら

に、書いたものをそのままにするのではなく、生徒間の相互添削や、模範解答例との照合を行い、客観性を持って自分の答案や原稿を見直す経験を積ませると、記述問題の自己採点の精度も上がり、設問への対応の指針を得させることができると考えられる。（左：具体例を考える問題に対する答案の一例）



(2) 学年における取組

本校において2回（6年間）学級担任を持ち、後半の3年間（令和3年度入学生）は学年主任を務めた。そこで特に意識したのは目標の「言語化」と「具体化」である。理想としての最終目標を言語化し、そこに至る手立てをできる限り具体化することで、担任団全員で目標と行動を共有することを目指した。下記は3学年の年度当初の学年会で掲げた目標である。

◎最終目標：社会の様々な変化に対応し、力強く生き抜くことのできる人間を育てる。

○学年目標（3学年時）：

- 学校生活全般に渡って最後まで真摯に取り組ませる。
- 学習時間の質と量を確保し、白河高校の最高学年にふさわしい学力を身につけさせる。
- 進路目標と適性に応じた志望校の選択と合格を実現する。
- 自主的に目標達成のための具体的な指針を立て、計画的に努力する姿勢を育てる。
- 基本的生活習慣の定着と、心身の健康管理を徹底させる。
- 他者を尊重し、責任を持って協働する態度を養う。

この目標を達成するための具体的な手立てとして、

- ・1年間の行事・学習計画の共有と調整
- ・国公立大学・難関大学の目標合格者数の共有

- ・模擬試験データの分析と個別指導の充実
- ・総合型・公募推薦選抜を意識した指導体制づくり
- ・推薦選抜出願者のクラス間調整
- ・学年内外の生徒情報および進路情報の共有
- ・個々の生徒に対するメンタルケアの充実
- ・基本的生活習慣の維持

などの細かい項目を立て、実際に何をするか、ということを随時話し合いながら学年経営を行った。

進学校の役割を果たすためのシステム構築や指導技術の追求も重要だが、その根幹にある最終的な目標は「人間としての成長」である。丁寧な生徒指導が進路指導にもつながると考え、学年会では、生徒たちが安心して学校生活を送れる環境を作ること、失敗を恐れず挑戦できる状況を設けることを担任団が常に意識するよう呼びかけた。

(右：共通テスト直前に発行した、教員からの手書きメッセージ入り学年通信)

3 実践の成果

本校の令和5年度卒業生の国公立大学現役合格数は118（国立大学80・公立大学38）、私立大学合格数368であった。

6クラス編成として初めて国公立大学合格数が100を超え、目標としていた「卒業生数の4割超」をクリアし、ほぼ5割に到達した。また、県の定める国公立難関大学への合格数5、私立大学の上位校にも一定の合格者を出すなど、ある程度は目標に沿った成果をあげることができた。

私の国語科の指導および学年経営がこの結果に影響を与えているという客観的な評価はできないが、3年間を通じて、学年の担任教員と生徒たちとの間の信頼関係を感じる場面は多く、生徒たちがこちらの励ましに応じ、受験期のストレスによく耐え、3月末まで努力を重ねたことが成果に結びついたのではないかと考える。「丁寧な生徒指導が進路指導につながる」ことを実感した3年間であった。

4 課題及び今後の取組の方向性

不登校生徒や、自分の望む進路が実現できなかった生徒への対応などの課題は残る。今後も、短期的・長期的な目標を持って指導に臨みたい。

国語科の指導も進路指導も、「表現」（言語化）を重視している点で似ているところがある。「言葉の可能性」は、演劇部の顧問として20年を超える経験の中で考え続けてきたテーマでもある。そのテーマをさらに追究しつつ、今後の教科指導・進路指導に生かしていきたい。

